

豊川流域のヒガンバナ自生地に関する補説

有 蘭 正一郎*

I はじめに

筆者は、前稿で「成立期が古い集落ほどヒガンバナの自生面積は大きい」という仮説を証明するために、豊川流域において、1989年9月22～25日に集落ごとのヒガンバナの自生面積の計測をおこない、その調査結果にもとづいて、集落ごとのヒガンバナの自生面積と、集落の成立期との関わりを考察した。また、その結果を踏まえて、ヒガンバナの日本への渡来期に関するひとつの仮説を提示した。〔有蘭 1990〕。その内容は、次のように要約することができよう。

豊川流域では、ヒガンバナは中流域の山麓緩斜面に立地する集落や、豊川の支流が山地を刻む谷底から谷の斜面に立地する集落に多く自生しており、とくに棚田状に展開する水田の畔に密に自生している場合が多い。しかし、ヒガンバナが多く自生している集落の水田率はかなり分散しており、水田率の高低と、ヒガンバナの自生面積の大小とは全く関係なく、水田が多い集落ほどヒガンバナの自生面積が大きいとはいえない。

他方、豊川上流域の山間部と、上位および中段丘上と、中下流域の沖積低地と、海岸部に立地する集落におけるヒガンバナの自生面積は小さい。これらのうち、河岸段丘上の集落には、畑地が卓越している場合が多い。沖積低地の

*ありぞの しょういちろう，愛知大学文学部

本稿は愛知大学文学部会発刊の『文学論叢』第96輯（1991）の再録である。13号掲載の論文補説として執筆されているので、著者及び同会の了解を得て、再掲するものである。（編集部）

自生面積が小さいのは、豊川の洪水により、ヒガンバナの鱗莖が押し流されることが多かったからであろう。

次に、『愛知県遺跡分布図』〔1972〕と『角川日本地名大辞典23 愛知県』〔1989〕を用いて、豊川流域 314集落の成立期を推定し、それとヒガンバナの自生面積との関わりを考察した結果、より古い時期に成立した集落ほど、ヒガンバナの自生面積が大きい傾向があることが明らかになった。また、縄文期の遺跡がある集落の中でも、縄文晩期の遺跡がある集落におけるヒガンバナの自生面積が、より大きいことが分った。

以上のことから、「成立期が古い集落ほどヒガンバナの自生面積は大きい」という仮説は、豊川流域に関するかぎり、成立することが明らかになった。また、地目との関わりで見ると、ヒガンバナはより古い時代に成立した集落の棚田型水田の畔に、もっとも多く自生していることが分かった。

ヒガンバナは、岩山や畑の縁など、乾燥した場所でも生育する植物であるのに、日本では水田の畔など、やや湿った場所に多く自生している。この一見すると矛盾するように思われる事実を無理なく説明するために、前稿で筆者はヒガンバナの日本への渡来期に関する次のような仮説を提示した。

すなわち、照葉樹林文化の農耕の発展段階〔中尾 1967, 佐々木 1982〕のうち、最後の水稻ドミナントの段階に入っていた東アジア南部から、完成された稲作技術を構成する要素のひとつとして、ヒガンバナはおそらく縄文晩期に日本に渡来したか、またはそれ以前に日本に渡来していたとしても、この時期に渡来したものが、現在自生するヒガンバナの直接の祖先ではないかという仮説である。豊川流域に関するかぎり、ヒガンバナは縄文期の遺跡がある集落に多く自生しているが、その中でも縄文晩期の遺跡がある集落に多く自生していることと、これらの集落では緩傾斜地に造成された棚田型水田の畔にヒガンバナが多く自生することが、その根拠である。他方、おそらく完成された稲作技術の渡来以前に、焼畑として使われた場所のひとつであろう河岸段丘上に立地する集落には、ヒガンバナはあまり自生していない。このことも、筆者の仮説を裏付ける材料になろう。

こうして日本に渡来したヒガンバナは、ある時期までは救荒植物として、作為的に水田の畔など比較的湿った場所で半ば栽培されていたが、稲をはじめとする穀物の生産が安定する時期に入り、人里植物になってからは、鱗茎でしか増殖できないがために、自生地をほとんど拡げることなく、現在まで命脈を保ってきたものと筆者は考えている。

筆者は、以上の調査および考察結果を、いくつかの研究会で発表し、多くの先学から、さらに検討すべき問題点の指摘を受けた。本稿では、次の三点の指摘について整理した結果を報告し、前稿を補いたい。

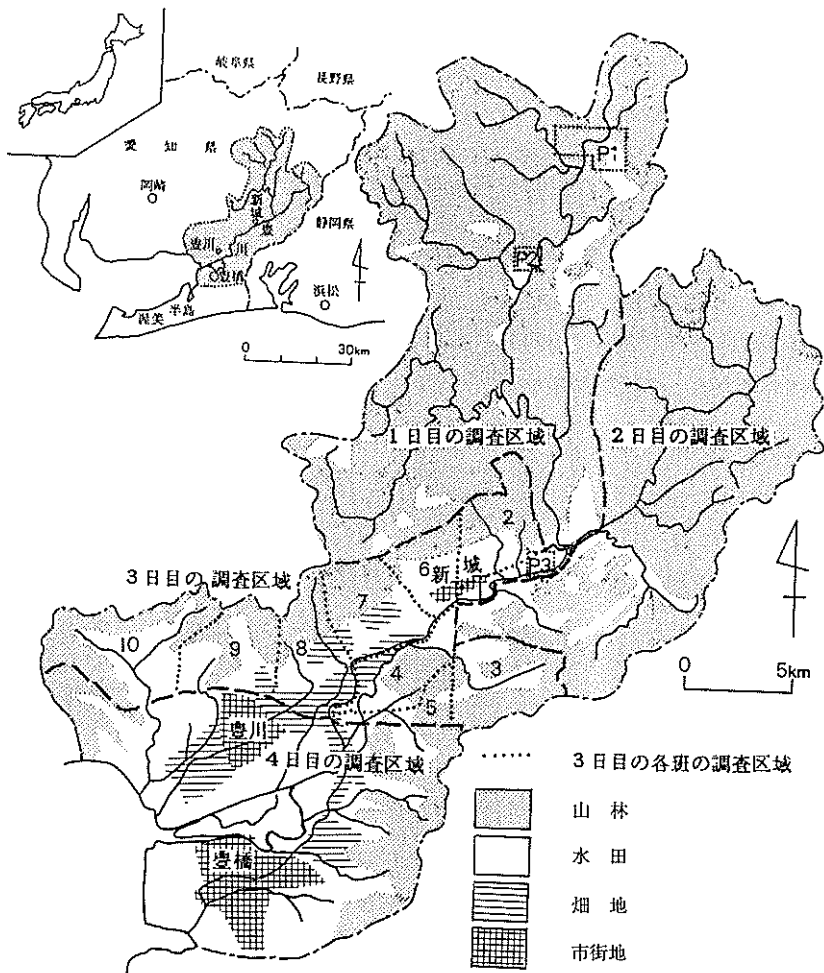
第一に、豊川上流域の山間部の諸集落は、概してヒガンバナの自生面積が小さいが、ここには縄文期の遺跡が点在している。ヒガンバナが縄文晩期に日本に渡来したとすれば、山間部においても、縄文後期までの遺跡の位置とヒガンバナの自生地との重複の有無、およびその程度を確認する必要がある。2つの事例をあげて、この問題を考察する。

第二に、各集落の水田面積の多少とヒガンバナの自生面積の多少とはあまり関係がないというが、水田率すなわち相対値と、ヒガンバナの自生面積すなわち絶対面積とを比較する前に、各集落の水田面積すなわち絶対面積との関わりを見て、上記の事実を確認しておく必要がある。相関図を作成して、この点の確認をおこなう。

第三に、ヒガンバナに関する文献は近世に入ってからでないと見られないといわれている。ここでは筆者が知るかぎり、ヒガンバナに関する初出文献と、その記述内容とを提示する。

以上の三点について説明をおこなった後、「おわりに」の項目で、今回の実地調査をおこなってみて筆者が感じた問題点をいくつかとりあげ、今後同じ手順を用いて他の地域で調査する際の参考に供したい。

なお前稿では、4日間の調査区域が分かる図を提示しなかったもので、ここに掲げる。およそ分水嶺か、縮尺1/2.5万地形図の図幅境か、大きな道路を調査区域の境界線に設定してある。例えば、ほぼ東西方向に引かれた3日目と4日目の境界線のうち、東部の直線は地形図の図幅境、中央部の緩い湾曲は東名高



P1 第2図の範囲

P2 第3図の範囲

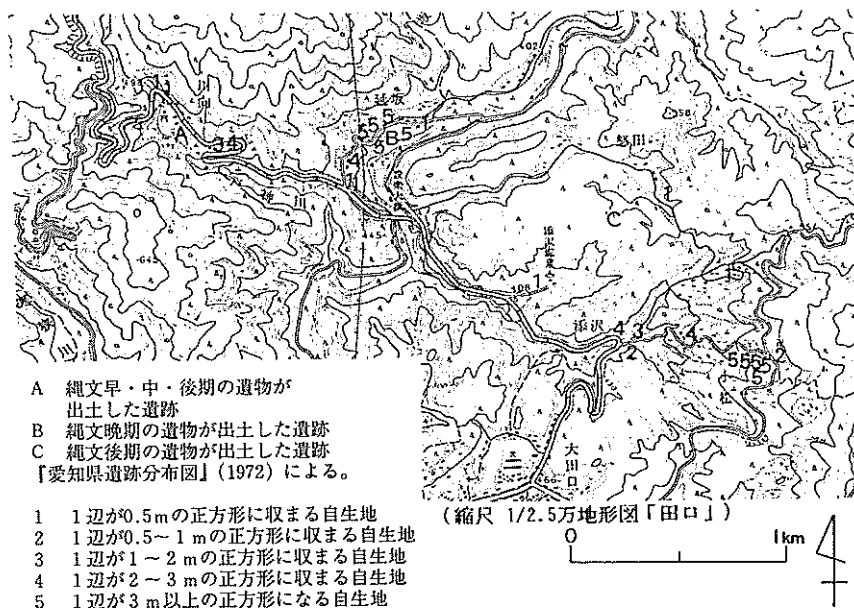
P2 第4図の範囲

第1図 調査地域の概観と調査分担区域

速道路，西部の緩い湾曲は分水嶺を使って引いてある。また，3日目の調査区域に限って，各班の分担区域を示してある。分担区域の境界は，河川か，分水嶺か，道路を使って引いてあるが，調査漏れがないように，境界部は他班の分担区域に入りこんで調査するように調査者に指示した。図が繁雑になるので，ほかの日の分担区域は示さないが，3日目と同じ要領で各班に調査区を割り当てた。

II 縄文期遺跡とヒガンバナ自生地との位置関係

第2図は豊川上流域の山間部にある3つの縄文期の遺跡と，その付近のヒガンバナ自生地との位置関係を示したものである。その位置は第1図を参照され



この図の範囲は，第1図にP1で示してある。

第2図 山間部に立地する縄文期の遺跡とヒガンバナの自生地との位置関係

たい。ここにある3つの遺跡は、ヒガンバナ自生地との関わりにおいて、それぞれ異なる特徴を有する。

縄文後期の石鏃と石ヒが出土したC遺跡は、山の北側斜面の針葉樹林（スギ・ヒノキ）の中に立地する。この遺跡は、豊川上流域の中ではヒガンバナがかなり多く自生する集落のひとつである小松（自生面積54m²、ランク3）の地籍内に含まれるが、遺跡近辺にはヒガンバナの自生地はまったくない。ヒガンバナは遺跡から1kmほど離れた、屋敷と棚田がある日当りのよい場所に集中して自生していることが、第2図から読み取れる。小松におけるヒガンバナの自生面積は、中流域の集落と比較すると小さいが、これは集落のほとんどが山林で占められているために、ヒガンバナの自生に適する日当りのよい場所が少ないからであり、第2図に示すように、ここでは日当りのよい狭い南向き斜面に、極めて密に自生している。

豊川上流域における縄文期の遺跡と、ヒガンバナの自生地との位置関係で、もっとも多い事例は、この小松のように両者が離れており、遺跡は山の斜面の山林中にあり、小松ほど多くは自生していないが、ヒガンバナは河谷の谷底から斜面の日当りのよい場所に群生する形態である。現在の時の断面という限定つきであるが、この形態を見るかぎり、縄文期の遺跡とヒガンバナの自生地とは関わりがないといえよう。

しかし、第2図に示す縄文晩期の遺跡Bとヒガンバナの自生地は、上記の事例とは異なる位置関係を示す。縄文晩期の土器片が出土したB遺跡は、小規模の河岸段丘上に立地する。この遺跡は川向集落の分村である延坂の屋敷地と耕地が集っている場所に立地しており、かつヒガンバナの自生地の中にあることが第2図から分かる。延坂だけでヒガンバナの自生面積は50m²（ランク3）あり、棚田の畔か屋敷ののり面に帯状に群生している。

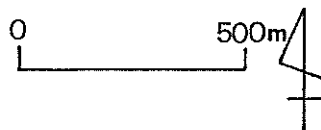
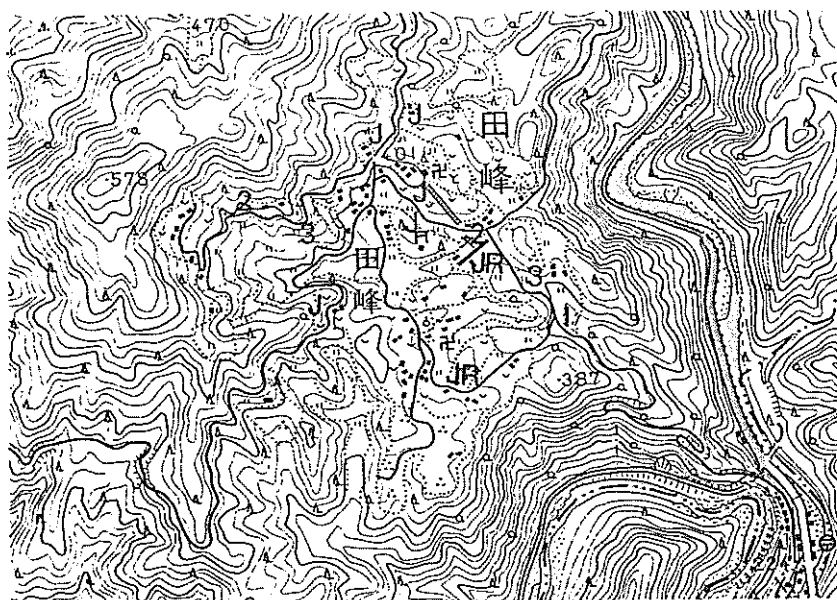
前稿で、筆者は豊川中流域の塩沢にある2つの縄文期の遺跡をとりあげて、縄文晩期の遺跡はヒガンバナの群生地の中に立地するが、縄文後期の遺跡近辺にはヒガンバナがほとんど自生しないことを述べた。延坂においても、縄文晩期の遺跡はヒガンバナの群生地の中に立地するのである。

豊川上流域には、縄文晩期の遺跡がある集落が延坂のほかに2つあるが、そのうちのひとつ（大林）は、遺跡とヒガンバナの自生地とが延坂と同じ位置関係にある。なお、もうひとつ（栃下）は、次に述べる川向と同じ位置関係にある。

縄文早・中・後期の土器片・石斧・凹石が出土したA遺跡は、山の南側斜面の畑の中に立地する。この遺跡がある川向集落には、ヒガンバナはあまり自生していない（7㎡，ランク1）。また、その自生地は遺跡からやや離れた日当りのよい斜面に位置する。両者の距離でいえば、ここは離れている小松と、重なっている延坂との中間形態を示す。日当りのよさでは遺跡のある場所も、ヒガンバナの自生地も同じであるにもかかわらず、両者はやや離れた位置にある。その理由はまったく分からないが、川向でも両者は重なっていないことだけを、述べておきたい。

第3図は、豊川上流域の準平原上に立地する^{だみね}田峰の集落にある7つの縄文期の遺跡と、その付近のヒガンバナ自生地との位置関係を示したものである。その位置は第1図を参照されたい。遺跡のうち、2つは出土した土器片・石斧・石鏃から、縄文後期の遺跡であるとされているが、そのほかは時期の記載がない。これらの遺跡は、いずれも日当りのよい緩斜面に立地し、棚田か畑になっている。

田峰ではヒガンバナの自生地は散在しており、かつ自生面積は小さい（7㎡，ランク1）。これらヒガンバナの自生地と、7つの縄文期の遺跡とは離れていること、および縄文後期の遺跡のうち、南側の遺跡近辺にはまったく自生していないことが、第3図から読み取れる。第2図で述べた3つの集落のうち、遺跡とヒガンバナの自生地とが離れている小松に近い状況が、ここ田峰でも見られるのである。ただし、田峰で注目すべきことは、縄文期の遺跡のある場所の土地利用が、日当りのよい棚田か畑であるにもかかわらず、ヒガンバナの自生地と重ならず、かつヒガンバナの自生地は分散しており、自生面積も小さいことである。このことは、縄文期のヒガンバナ自生地が、のちに山林で覆われて、ヒガンバナが生育しにくくなったために、豊川上流部では縄文期の遺跡付近の



J 縄文期の遺物が出土した遺跡
 JR 縄文後期の遺物が出土した遺跡
 (いずれも「愛知県遺跡分布図」による)

図中1～5の番号の内容は第2図と同じ。
 この図の範囲は、第1図にP2で示してある。

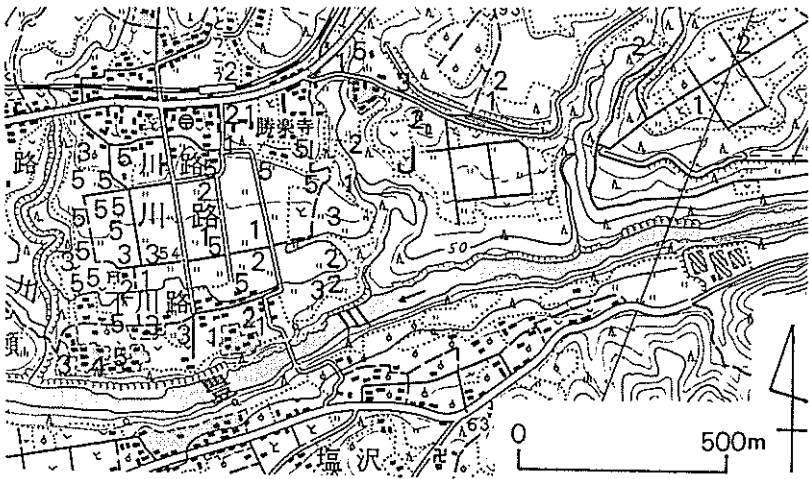
第3図 準平原上に立地する縄文期の遺跡とヒガンバナの自生地との位置関係

ヒガンバナの自生地が見られないのではないかと解釈が妥当ではないことを示唆している。すなわち、準平原上に立地する田峰では、おそらく縄文期から現在に至るまで、日当りのよい状態が継続したにもかかわらず、ヒガンバナの自生面積は小さいし、また自生地と縄文期の遺跡とが、やや離れているからである。

以上述べたように、豊川上流域において縄文期の遺跡とヒガンバナの自生地との位置関係を検討すると、縄文後期までの遺跡とヒガンバナの自生地とは離れているが、縄文晩期の遺跡とヒガンバナの自生地とは重なる場合が多いことが明らかになった。これで「縄文後期までの遺跡とヒガンバナの自生地とは重ならないことを確認する必要がある」との指摘に答えることができたし、また縄文晩期の遺跡とヒガンバナの自生地とは、豊川の中流域だけでなく、上流域でも重なることも確認することができた。

蛇足ではあるが、ここで縄文晩期の遺跡とヒガンバナの自生地とは、かならずしも一致しない場合もあることを、豊川中流域の集落を例にして述べてみたい。

第4図は、豊川中流域右岸の下位段丘上に立地する川路集落における縄文期



↓ 縄文早・晩期の遺物が出土した遺跡（『愛知県遺跡分布図』による）

図中1～5の番号の内容は第2図と同じ。
この図の範囲は、第1図にP3で示してある。

第4図 下位段丘上に立地する縄文期の遺跡とヒガンバナの自生地との位置関係

の遺跡と、ヒガンバナの自生地との位置関係を示した図である。縄文早・晩期の石斧と土器片が出土した遺跡（図中記号J）は、段丘末端部の日当りのよい畑に立地する。他方、ヒガンバナの自生地は遺跡付近にも点在するが、群生地は豊川に流入する小河川を西に渡った段丘上にある。川路におけるヒガンバナの自生面積は195m²（ランク4）で、川路は豊川流域でもヒガンバナが密に自生する集落のひとつであるが、第4図に示すように、遺跡とはやや離れた場所に群生地はある。縄文晩期の遺物が出土した遺跡であることが、問題をさらに複雑にしている。ちなみに、第4図の下端に見える集落は、前稿で取り上げた縄文晩期の遺跡とヒガンバナの自生地とが一致する塩沢である。豊川を挟んで、川路と塩沢とは、縄文晩期の遺跡とヒガンバナの自生地との重なり具合が、微妙に異なるのである。川路におけるヒガンバナの自生状況の解釈は、今のところ筆者にはできない。縄文晩期の始期とされている紀元前1000年頃から数えても、現在は3000年近く経過しており、この間、ヒガンバナを取り巻いてきた環境と、その変化を説明することは、今の筆者には不可能だからである。

Ⅲ 集落別の水田面積とヒガンバナ自生面積との関わり

前稿で述べたように、ヒガンバナは緩斜面に造成された棚田の畔に多く自生する。しかし、広い水田を有する集落ほど、ヒガンバナの自生面積が大きいとは限らない。おそらく近世に入って造成されたか、毎年水稻の栽培をおこなうようになった氾濫原の水田の畔には、ヒガンバナはほとんど自生していないからである。

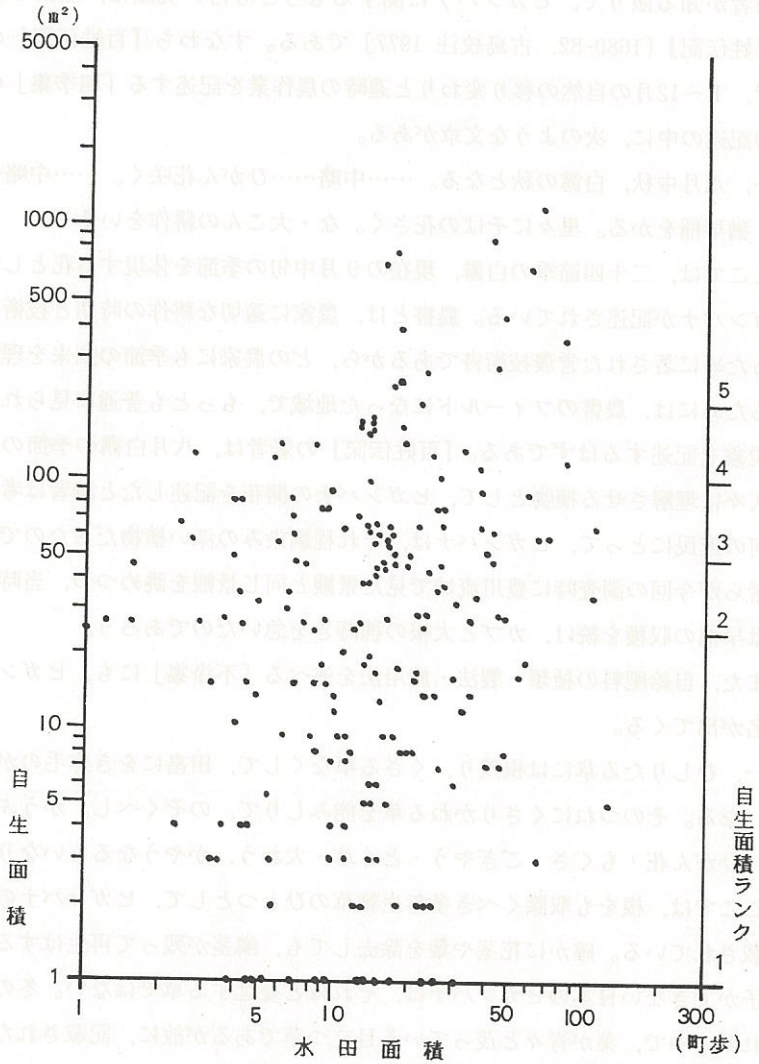
前稿では、これを説明するために、集落ごとのヒガンバナの自生面積と、水田率との相関図を提示した。前稿で相対値である水田率を用いたのは、規模が異なる各集落を同じ土俵に乗せて、ヒガンバナの自生面積との対比をおこなうためであった。しかるに、ある研究会の場で、まずは各集落のヒガンバナの自生面積と水田面積との比較、すなわち絶対値間の比較をおこなって、両者はかならずしも正の相関を持たないことを確認しておく必要があるとの指摘を受け

た。その確認のために、第5図を作成した。なお、前稿の第7図では、豊川流域314集落のうち、農林業センサス集落カードの集落名と一致する202集落について相関図を作成したが、今回は集落カードで集落名の前に東西南北が付いている場合は、これらを集計して、ひとつの集落にした。ここでは、これら6集落も加えた208集落の相関図を作成してある。

第5図から、各集落の水田面積と、ヒガンバナの自生面積との間には、弱い正の相関があることが読み取れる。これは当然のことであり、筆者はむしろ両者の相関が弱いことに驚かされる。すなわち、水田面積とヒガンバナの自生面積とは、予期していた以上に、関わりがないことが明らかになったのである。それは、ほとんど水田がないのにヒガンバナがある程度自生する集落がある一方で、広い水田を有するにもかかわらず、ヒガンバナがほとんど自生していない集落も、いくつかあるからである。後者のほとんどは、豊川下流域の氾濫原か、広い谷底平野に立地する、中世以降に成立した集落である。いずれもヒガンバナの鱗茎が定着しにくい地形環境に立地しており、またヒガンバナへの依存が消滅したと思われる時期以降に成立している。第5図に強いて回帰線を引くとすれば、 $y = x$ 、すなわち水田1町歩につき、1㎡のヒガンバナが自生する状態が想定できるが、その分散度はかなり大きく、その規則性を説明するよりも、「ばらつき」の説明をおこなったほうが、はるかに生産的である。そこで、前稿の第7図に目を移して、ヒガンバナの自生面積と水田率との関わりを確認してから、「ばらつき」の要因を明らかにする手順を踏めば、前稿の論旨がより理解できるであろう。結果的に前稿の論旨は補強されたのである。

IV ヒガンバナに関する初出文献

筆者は前稿でその渡来期が縄文晩期であろうとの仮説を提示した。しかし、文献の上で確実にヒガンバナに関する記述が出てくるのは、近世に入ってからである。



水田面積は1960年の数値。
1970年農林業センサ集落カードより作成。

第5図 集落の水田面積とヒガンバナの自生面積との相関図

筆者が知る限りで、ヒガンバナに関するもっとも古い文献は、三河の農書『百姓伝記』〔1680-82. 古島校注 1977〕である。すなわち『百姓伝記』の巻頭で、1～12月の自然の移り変わりと適時の農作業を記述する「四季集」の8月の記述の中に、次のような文章がある。

一、八月中秋、白露の秋となる。……中略……ひがん花咲く。……中略……
猶早稲をかる。里々にそばの花さく。な・大こんの耕作をいそぐ。

ここでは、二十四節季の白露、現在の9月中旬の季節を体現する花として、ヒガンバナが記述されている。農書とは、農家に適切な耕作の時期と技術を伝えるために著された営農技術書であるから、どの農家にも季節の到来を理解させるためには、農書のフィールドになった地域で、もっとも普通に見られる自然現象を記述するはずである。『百姓伝記』の著者は、八月白露の季節の到来を人々に理解させる植物として、ヒガンバナの開花を記述したと筆者は考える。三河の庶民にとって、ヒガンバナは、それ程馴染みの深い植物だったのである。筆者らが今回の調査時に豊川流域で見た景観と同じ景観を眺めつつ、当時の農家は早稲の収穫を続け、カブと大根の種蒔きを急いだのであろう。

また、自給肥料の種類・製法・施用法を述べる「不浄集」にも、ヒガンバナの名が出てくる。

一、むしりたる草には根残り、くさる事なくして、田畠にをき作毛のがいと
なる。そのつねにくさりかねる草を能みしりて、のぞくべし。かうぶし・
ひがん花・もぐさ・ごぎやう・とく草・大わう、かやうなるるいなり。

ここでは、根をも取除くべき多年生雑草のひとつとして、ヒガンバナの名が記載されている。確かに花茎や葉を除去しても、鱗茎が残って再生はするが、種子ができない日本のヒガンバナは、それほど蔓延する草ではない。冬の間、枯れ草の中で、葉が青々と茂っている目立つ草であるが故に、記載されたのであろうか。

従来、ヒガンバナに関する初出文献として、貝原益軒の『大和本草』〔1709〕が記述する「石蒜（ジビトバナ・ステコノハナ） 老鴉蒜也 シビトバナト云 四月或八九月赤花サク 下品ナリ コノ時葉ハナクテ花サク故ニ筑紫ニテステ

子ノ花ト云」や、与謝蕪村〔1716-83〕の句、「曼珠沙華蘭に類て狐鳴く」が挙げられてきた。ヒガンバナが日本に渡来してからの時間に比べると、たいした年数の差はないが、農家の生産・生活に関わりが深い植物として、かつ今回調査をおこなった豊川流域を含む三河で著された農書に、ヒガンバナが記述されていることは、筆者にとって大きな意義があるので、ここに加筆した次第である。

ヒガンバナの鱗茎に含まれるデンプンを、毒抜きして食べた西日本山間部の事例については前稿で述べた。しかし、豊川流域でヒガンバナを加工して食べたとする文献を、筆者は知らない。『鳳来町誌 民俗資料編』〔1976〕に、「昔、飢饉時……中略……くず・わらび根・ひがんばんなどは根を潰してでんぷんにして食べた」との記述があるが、その情報源を鳳来町教育委員会に問い合わせたところ、「経験者からの聞き取りにもとづいた記述ではなく、飢饉時における一般論として書かれたものであろう」との事であった。また、豊橋市立図書館が所蔵する羽田文庫の中に、羽田八幡社の羽田野敬雄が19世紀前半に写したと思われる『ききんのこころえ』『飢をしのぐ法』など、数種類の救荒書があるが、いずれもヒガンバナに関する記述はない。

V おわりに

本稿では、前稿で説明不足であった三点について補足説明をおこなった。

豊川上流域の山間部に立地する縄文期の遺跡付近には、ヒガンバナはほとんど自生しておらず、また集落全体でも自生面積は小さいことが確認できた。ただし、縄文晩期の遺跡に限っては、遺跡とヒガンバナの自生地とが重なり、かつ自生面積が小さい山間部の中では、例外的にヒガンバナが群生していることも明らかになった。このことは「ヒガンバナが縄文晩期に稲作とセットになって日本に渡来したか、またはこの時期に渡来したヒガンバナが現在自生するヒガンバナの直接の祖先ではないか」という筆者の仮説を補強する材料になると考える。以上が第一点の補足説明のまとめである。

第二点目に、各集落における水田面積の大小と、ヒガンバナの自生面積の大小とは、ほとんど関係がなく「ばらつき」が大きいことを、両者の相関図を作成して明らかにした。前稿でおこなった水田率とヒガンバナの自生面積との対比だけでなく、絶対面積である水田面積との対比でも、おなじ結果が得られたのである。この「ばらつき」の要因のひとつは、集落が成立した時期の早晩であり、もうひとつは集落成立後の地表面の改変である。後者には、洪水や土石流など、自然の営為によるものと、耕地整理や宅地造成など、人間の営為によるものがあるが、いずれもヒガンバナの鱗茎が自生地から除去される要因である。ほぼ同じ時期に成立したと思われる集落の間で、ヒガンバナの自生面積に「ばらつき」が見られるのは、主に後者の諸要因によるものであり、豊川の氾濫原に立地する集落や、市街地に包含されてしまった集落におけるヒガンバナの自生面積が小さいことについては、すでに前稿で述べたとおりである。

第三点目に、ヒガンバナに関する初出文献として、従来言われてきた18世紀初頭の『大和本草』よりも30年ほど古い、17世紀後半の三河の農書『百姓伝記』があることを提示した。そこには、農家に白露（太陽暦の9月中旬）の季節の到来を教える花として、ヒガンバナが記載されている。これは、ヒガンバナが三河の庶民の生産・生活に密着した植物であったことを示しているように思われる。

これまで論じてきた三点の指摘のほか、学会や研究会で多くの示唆を得ることができた。その中から二点を紹介したい。

ひとつは、ヒガンバナの原産地と考えられている東アジア南部には、種子ができない三倍体のヒガンバナのほか、種子ができる二倍体のものがあるのに、なぜ日本には三倍体のものだけが渡来したかについて、三倍体のヒガンバナのほうが鱗茎が大きいために、これが選択的に日本に持ち込まれたのではないかとの見解が示されたことである。人為交配で三倍体になる種無しスイカは、種子ができる二倍体の果実より大きいことは、よく知られている。日本に渡来したヒガンバナも、そのような発想のもとで三倍体のものが選択されたのであろうか。これは東アジア南部で調査すれば、この解釈の是非が明らかになるであ

ろう。示唆に富んだ解釈である。

もうひとつは、食用または救荒用植物としての役割が消滅した後でも、なぜヒガンバナは水田の畔で自生し続けたかについて、赤いヒガンバナの花に、登熟期に入った稲を諸々の邪悪から守る底知れない力を、昔の人は感じ取っていたのではないかという見解が提示されたことである。これを証明するには各地の伝承を集めて検討する方法があるが、ヒガンバナの役割がほぼ完全に風化してしまった現在では、この解釈を証明するのは、かなり困難であろう。それでも妥当性のある解釈であると、筆者は考える。

さて、前稿をコメントしていただいた佐々木高明氏から、ヒガンバナの日本への渡来期、厳密に言えば、豊川流域への渡来期に関する筆者の仮説には、考古学的データの裏付けがないとの厳しい指摘があった。もっともな批判であるが、これに応えるためには、豊川流域に立地する先史時代の遺跡から採取した植物遺体の種類を判別し、それらの単位面積当たり密度を計測する生物考古学的手法を用いた研究の成果がデータとして不可欠である〔佐々木 1989〕。しかし管見の限り、豊川流域には、この手法による研究成果は見当たらず、今のところ佐々木氏の指摘に応えることはできない。また、前稿で筆者が述べたかったのは、ヒガンバナが自生する場所の土地条件と、現在におけるヒガンバナの自生面積の集落ごとの大小から見て、ヒガンバナは、プレ農耕段階ではなく、稲作ドミナントの段階に入ってから、完成された稲作技術を構成する要素のひとつとして、稲とともに日本へ渡来した植物ではないかということであり、その時期が縄文晩期あるいは弥生期のうちのどの時点であるかについては、筆者にとって大きな問題ではないのである。今後、豊川流域で佐々木氏の指摘に応えられる新たなデータが入手できれば、改めて筆者の仮説の是非を検討したいと考えているが、現段階では、これ以上言及することは避けたい。

最後に、ヒガンバナの自生面積調査をおこなってみて、方法的に反省すべき点、および具体的な対応策はないが、問題として残された点をいくつかあげてみたい。同様な目的と方法で、ほかの地域で調査される際の参考になればさいわいである。

- 1) 西南日本の暖地に自生するヒガンバナにとって、豊川流域でも気温の低い上流域の山間部は生育しにくい場所であり、たとえ少々日当りはよい場所であっても、自生面積は元来小さいのかもしれない。
- 2) ヒガンバナの開花期である9月22日～25日の4日間にわたって、豊川流域全体の調査をおこなったが、平地のヒガンバナの開花は、山間部よりも数日遅いので、低地の自生面積を、山間部よりもやや小さく計測したかも知れない。
- 3) 開花期に自生面積の計測を一斉におこなったが、時には開花せず、葉だけが出る場合もある。その分、小さく計測したかも知れない。
- 4) 開花後、調査までの間に刈り取られた場合や、市街地化が進行している集落では、元来の自生面積の計測ができない。とくに後者の場合は、再調査もできない。
- 5) 草刈りをおこなわなくなった田畑の畔とのり面には、ススキが密に自生して、日当りの良い場所を好むヒガンバナの生育を阻害する。山間部の集落での聞き取りで、耕地やのり面の手入れが行届かないために、ここ20年ほどの間に、ヒガンバナがほとんど生えなくなった場所があることが分かった。これもヒガンバナが人間の管理下で生育してきた植物であることを物語っている。
- 6) 大縮尺の空中写真でヒガンバナの自生面積を計測する方法もあるが、豊川流域にかぎって言えば、同じ時期にサルビアの花がかなり咲いており、両者の判読は困難であろう。

引用文献

愛知県教育委員会

1972 『愛知県遺跡分布図』94 愛知県教育委員会。

有菌正一郎

1990 「豊川流域におけるヒガンバナの自生面積と集落成立期との関わり」『農耕の技術』13：1-28. 農耕文化研究振興会。

貝原益軒

1709 『大和本草』巻九 草五 雑草類〔白井光太郎校注、1975、『大和本草』第一冊、332-333、有明書房〕。

角川日本地名大辞典編纂委員会

1989 『角川日本地名大辞典23 愛知県』2078、角川書店。

佐々木高明

1982 『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ』253、日本放送出版協会。

1989 「東アジアにおける稲作の展開と日本」『東・南アジア農耕論』第八章、417-488、弘文堂。

著者不明

1680-82 『百姓伝記』〔古島敏雄校注、1977、『百姓伝記』上巻、28、岩波書店〕。

中尾佐助

1967 「農業起源論」『自然—生態学的研究』329-494、中央公論社。

羽田野敬雄

19世紀前半 「ききんのころえ」『飢をしのぐ法』、豊橋市立図書館蔵。

鳳来町教育委員会

1976 『鳳来町誌 民俗資料編(1)民俗資料』71-72。鳳来町教育委員会。